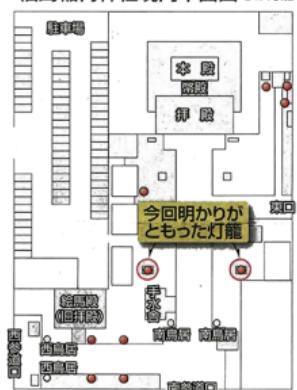


住民見守る 石灯籠再び



約半世紀ぶりに復活した石灯籠の明かり
に見入る福島稻荷神社宮司の丹治さん

福島稻荷神社境内平面図 ●は灯籠



約半世紀ぶりに復活した石灯籠の明かり
に見入る福島稻荷神社宮司の丹治さん

昭和二十年代に年末恒例の
「年の市」に並んだ露店から
出火し、境内にあった石製の
大鳥居が崩れた。以来、境内
では火気の使用を控え、石灯
籠にも火が入らなかつた。
震災が転機となつた。激し
い揺れで地域住民が境内に身
に付いた。丹治さんは「震災の
時に、この石燈籠が倒れても、
倒れないでほしい」と願ひ、
丹治さんは「小さな明かり
だが、住民に大きな癒やしを
与えてくれるはず。今後も地
域住民の心のよきところとな
れるように努めていきたい」
と話している。

再び点灯したのは境内に計
十基あるうちの二基。

境内に計
十基あるうちの二基。

福島市富町の福島稻荷神社にある石灯籠が今年夏、約半世紀ぶりに明かりがともった。東日本大震災直後には境内で周辺住民の一時的避難を受け入れた。明るい境内は夜間でも避難場所として活用できる。宮司の丹治正博さんが「地域住民の安心・安全の向上につなげ、復興に向けた希望のともしびにしたい」と復活させた。

境内災害時の避難場に 境内災害時の避難場に

配置は図の通り。一九〇二(明治三十五)年三月に当時の福島職工組合が奉納した。高さ五メートル、台座の四方は二・四四である。

を寄せた。夜を越す人はいない
かったが、当時の境内は薄暗く、「夜になればきっと不安を募らせる人もいたと思う。明かりは住民に安心を提供で

し、夜が明けるまでともる。

電源を必要とせず、非常時で

も点灯可能だ。

神社は市中心市街地にある。

丹治さんは災害発生時など万

一の際は、住民の一時的な避

難場所として境内を活用して

もうう考へた。さらに点灯す

る石灯籠を増やすことも検討

していく。眞理神社によると、

石灯籠の発光に太陽光発電を

適用した例は県内の神社でも

珍しいといふ。

参拝客からは「風情を感じ
られる」「一晩間でも安心して
参拝できる」といった声が上

がっている。境内に隣接する
建物で活動するNPO法人市
民公益活動パートナーズ代表
理事の古山郁さん(左)は「地域
にとって良いこと。霧雨氣



2017(平成29)年
8月18日
金曜日